



TITLE:

静脩 Vol. 4 No. 4 (1967.11) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 4 No. 4 (1967.11) [全文]. 静脩 1967, 4(4)

ISSUE DATE:

1967-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65921>

RIGHT:



静脩

1967年 11月

Vol. 4, No. 4

The Kyoto University Library Bulletin

数 学 図 書 室 の 今 昔

福 原 満 洲 雄

私は東大の数学科を卒業して、大学院に2年間在学の後、北大に赴任。ここで6年間を過して九大に移り、工学部に2年、理学部に約10年、母校東大に戻つて約17年、さらに京大数理解析研究所に転任となったので、これまでにそれらの数学の図書室を利用してきたし、数学の図書室の変遷を実際に目のあたりにみてきた。

東大の数学教室はいうまでもなく日本の代表的な数学教室ではあるが、私が学生時代の数学の図書室は誠に貧弱なものであった。詳しい数字は知らないが、現在でも蔵書は2～3万冊の程度だから、当時はせいぜい3～4千冊位だったのだろう。雑誌の種類も20位と思われる。専任の図書係もなく、教室ただ1人の助手が図書係を兼ねていた。

そのころ理学部の数学教室は東大、京大、東北大にあっただけで、その中で最も豊富な蔵書をもっていたのは東北大の数学教室であろう。東大では見ることのできない雑誌も「東北数学雑誌」との交換で入手していたようである。3数学教室のうちで最も新しい東北大学数学教室の創立時の中心であった林鶴一教授が「東北数学雑誌」の刊行に力を入れたその見識に敬意を表したい。

東北大学の数学教室が誕生してから長い間数学教室の新設がなかったのであるが、昭和5年、私が赴任する1年前に北大に理学部が新設されたのであった。吉田洋一、功力金二郎、河口商次3教授のうち、東北大出身の河口教授が大きな抱負をもって図書室の整備に当られた。世界の大勢に遅れないように研究を進めるには旧3教室の規模では不十分であるというので、紀要を刊行して雑誌の交換に努力する一方、数学専用の書庫のほかに雑誌閲覧室も設け、専任の係員も2名を配置するといった調子で、東大の数学図書室より知らなかった私にはずいぶん立派なものに見えた。

北大につづいて新設された阪大理学部の数学教室は完全4講座で出発したから、3講座の北大数学教室より人員構成の面でも、財政的の面でも北大よりは有利だったようである。このようにして新しい数学図書室は北大と阪大によって代表されるようになった。

昭和14年に九大に理学部が新設されることになり、図らずも私が数学教室設立の責任を負うことになった。図書室の整備については北大での見聞を基にし、研究活動の源泉として雑誌の蒐集に最重点を置くという方針を立て、バックナンバーの購入にできるだけの手を尽した。発足時は私がただ1人の教授で、本部均、北川敏男君が助教授、古屋茂君が助手、佐藤徳意君が副手、ほかに図書係1名といった組織だったので、型録を集めたり、発注をしたり

するのに教室の全員が協力した。やがて第2次大戦となり図書輸入の途が閉されるのであるが、その前に最初に予定したバックナンバーの大部分は入手することができた。発足時の規模は小さかったようであるが、予算的規模は北大、阪大と同程度であった。さらに昭和17年には完全5講座となって、日本で最大規模の数学教室となった。同年に名大理学部も新設され、数学教室はやはり完全5講座として発足することになった。

終戦後東大に戻ってみると、教室の助手は2名、雇員1名で、助手1名だけより少しはよくなったとはいっても、以前の北大にもおよばない実状には全く情けなかった。これから東大数学教室近代化のため予算の増額、人員組織の充実の努力がつづけられた。そのうちに数学の重要性が次第に社会的にも認識されてきたので、講座倍增計画を打出し、最近に至って漸く殆んど完全な9講座から成る数学教室となり、図書室も日本の代表的な教室にふさわしいものとなってきた。

しかし戦後急激に増大した文献は、従来のような網羅主義的な蒐集計画では財政的にも空間的にも破綻を来たすことが明らかとなってきた。また研究の急速な発展は迅速な情報活動を要求する。このようにして図書館の近代化ということが日本でも問題とされるようになってきた。この秋に当り全国共同利用研として京大に付置された数理解析研究所の図書室が数理関係の専門図書館として果すべき役割は重大である。

蒐集計画は全国的視野に立ってなされるべきであり、主要な数学図書室間の緊密な協力を進めるために、相互に情報を提供する組織も必要であり、情報活動に電子計算機をどのように活用するかも今後の課題となる。学術会議の長期研究計画に織り込まれている文献センターの構想とも関連づけて今こそ専門図書室の今後あるべき姿について慎重に検討し、将来計画を確立すべきであろう。

(数理解析研究所所長)

目 録 カ ー ド 検 索 へ の 手 引 き

附属図書館の目録カード室が移転して、目録が整理統合されたことは、前号でお知らせしたが、この機会に、その構成および検索方法について、簡単に説明しておこう。

I 全学総合目録（1階目録カード室）

A 和漢書書名目録

- 1 昭和39年7月（受入）を境にして大型カード（新）と小型カード（旧）に分れている。
- 2 書名の五十音順に排列されている。（原則）
ただし小型カード（旧）は次のような特殊な取り扱いをしている。
- i 書名の頭の字が1音の漢字である場合は、2音のものおよび仮名よりも前に排列されている。

例 技術の歴史 **ギ**ジュツノレキシ

菊と刀 **キ**クトカタナ

- ii 長音のウ（またはー）はア行に排列しないで「ン」の前に排列されている。

例 コア…コワ…コウ（コー）…コン

- iii 頻出する漢字（同音は画数順）または語はブロックを設けてまとめて排列されている。カード箱の見出しをよく見て検索して

下さい。

- 3 カードの左上欄に記入されている部局（教室）名は、その図書の所在部局を示す。次のような請求記号のみのものは本館所蔵を示す。

4-20 4-20
カ15 または カ
 15

上記の欄が空白のカードは最下段の書名をもう一度検索して下さい。所在部局はそのカードに記入されている。

	地	球は青かった ユーリー・ガガーリン著 筑摩書房 1966 (現代世界ノンフィクション全集22の内)

B 和漢書著者名目録

- 1 昭和23年4月以降受入の全学和漢書を、著者名のアルファベット順に排列してある。
- 2 雑誌・新聞などの逐次刊行書や叢書・一般的な語学辞書等の編著者は省かれている。これらの図書については、書名目録または雑誌目録（冊子）を見て下さい。
- 3 請求記号等については書名目録の項Aの3を参照して下さい。

C 洋書著者名目録

- 1 昭和39年（1964）7月（受入）を境にして大型カード（新）と小型カード（旧）に分れている。
- 2 標目のアルファベット順に排列されている。著者名目録（個人および団体著者から記入）であるが、雑誌・辞典・叢書等で書名から記入されているものは、書名で排列されている。

- 3 部局（教室）名はカードの左上欄に記入されているが、請求記号のみの場合は本館所蔵を示す。

D 雑誌総合目録（冊子）

- 1 和文編（中国・朝鮮文を含む）
昭和41年8月末現在
- 2 自然科学欧文編 昭和38年12月末現在
- 3 人文科学欧文編 昭和41年8月末現在

排列は和洋とも誌名のABC順

II 分類目録（2階閲覧室前）

A 本館和漢書分類目録

本館和漢書分類表による。分類項目ごとに書名の五十音順。

B 本館洋書分類目録

本館洋書分類表による。分類項目ごとに著者名のABC順。

C 本館特殊文庫目録

各独自の分類表による。

D 法学部和漢書分類目録

法学部和漢書分類表による。分類項目ごとに書名の五十音順。

E 経済学部和漢書分類目録

経済学部和漢書分類表による。同じく書名の五十音順。

〔付記〕

- 1 総合目録には本館の書庫内の図書も、開架室、参考室の図書も区別せず、すべて繰り込まれていますが、開架室、参考室の図書は館外貸出ができません。
- 2 総合目録によって求められた図書が、部局の図書である場合は、利用（閲覧、貸出、複写等）の可否や条件が、各部局（教室）ごとに異なりますから、学内図書相互利用一覧表（雑誌目録の傍に備え付けてある）をみて下さい。

ポーランドにおける大学図書館の四季

中山 昭 吉

○ 大学制度の起原と発展そのものが日本と異なる事情から、西ヨーロッパと同様に、東ヨーロッパの大学図書館の雰囲気そのものも、かなり日本と異質なものを感じさせるのは当然であろう。

新学年の開始は紅葉の秋である。大学構内の中心にあって、大木に囲まれた図書館附近の白いベンチが落葉に彩られる頃ともなれば、学生たちが肌寒い木枯らしに吹かれて、自然に誘いこまれる殿堂ともいうべきものが、私のワルシャワ大学図書館にまつわる印象の一つである。

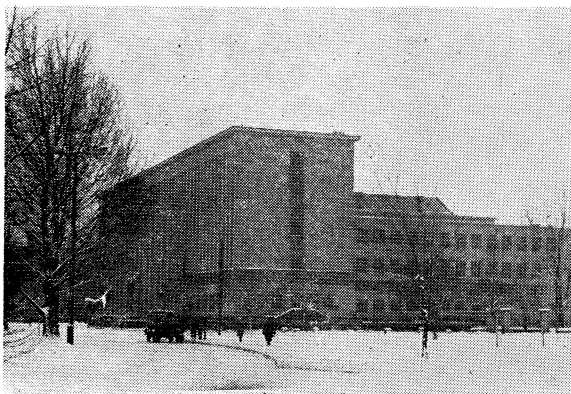
19世紀初頭に建造された図書館は、16世紀に創立された大学の中では比較的新しいものであるが、悲劇にみちたこの国の歴史の重みが扉を押す者の手に重く感じられる。まず貸出事務所、カード室、トイレがあって閲覧以外の最低の用件が満足されるが、階上の閲覧室に入るにはオーバと帽子などの筆記用具とノート以外の携行品を預かり係に手渡して番号プレートを受取る。この際の挨拶や世間話の機会はもちろんのこと、薄暗い階下が身軽になった入館者の服装で花が咲いたような風情は、陰うつな戸外を忘れさせてくれる一瞬である。トイレに行って髪をとくのは女性ばかりとは限らない。こうした雰囲気をかもし出す館内の機能は、入館数分後のわれわれに教会の聖壇にでもきたような壮重な気分を抱かせる。

閲覧室。それは日本と比較して、単調すぎる外界とは反対に、実に変化に富む色彩を発散する小世界という表現が適切であろう。なぜなら、燈火に輝く豪華な蔵書の壁を中心に、多くの女性のアクセサリが趣をそえるからだ。時には修道服あり、軍服あり、白髪の老女性の姿さえもが彩りをくわえる。

さて、こうした光景を展開させるこの国の入館者は学生が大半を占めてはいるが、正規の学生の多数が職場や軍隊に籍を置いていた者であったり、かなり発達した通信教育生であったりして、外観はまったくの街頭でみかける一般社会人である。教職員、大学院生、外国人留学生をも含めて年齢構成の巾が実に広い。私の博士課程ゼミ（ポーランド近代史）のメンバーを例にあげれば、半数近くが女性で、恩給生活の老婦人、大学講師、助手、高校教員、

将校、資料編集所所員、さらに図書館員そのものが常連であったが、これらの人々が入館者の一部を構成するのである。このような現象は、欧米一般に、大学の機能自体が一般市民の成人教育の場でもあるという伝統がもたらした結果といえよう。だから、大学図書館が都市案内書の中で誇り高い名所の一つに数えられても不思議ではない。

○ 戦災後に復興をとげた近代都市ワルシャワにあっては、幸いにも完全な破壊をまぬがれた大学図書館



（冬の日のヤギェウオ大学図書館）

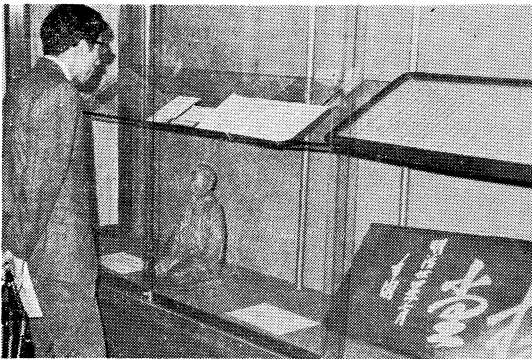
とその周辺は昔の面影を残している。逆に、生きている中世都市さながらの古都クラクフ（クラコフ）の大学図書館は、皮肉といえるほどヨーロッパでも屈指の近代的なものであった。

クラクフ市はポーランド民族の誇る由緒ある文化・学問の都市の名にはじない。1964年に600年祭を祝賀したこの大学は、創立者の国王の名にちなんで「ヤギェウオ大学」と正式に称され、コペルニクスも学んだという講義室や図書室もある。たしか、若い日にポーランドに滞在したド・ゴール大統領が、つい先日、大満悦でこの大学を訪問しているが、たんなる観光的価値以上に、中・東ヨーロッパの名門を誇っており、近代化をとげた大学自体の規模はワルシャワ大学をはるかにしのぐものがある。

霧に煙る冬の夜、王城から旧大学地区にかけて黄金時代のポーランド中世に帰った気分でも市外に向って10分も歩けば、巨大な各学部、博物館、学生寮などと並んだ図書館に達する。ヨーロッパの風雲が急を告げた第二次大戦の開戦の年に完成したこの図書館は、豊かとはいえなかったこの国の、今は国の片隅になった古都にそびえていることとあわせて、あたかも民族の魂の結晶とでもいうべき、ある一種の宗教的モニュメントの感じを与える。

大学の案内書によれば、蔵書数は約150万を数え、さらに、70以上の各学科図書室の約65万にのぼる書籍の管理にあたる中央大図書館である。

春が訪れて、復活祭の後には、試験や論文で学生のざわめきが廊下によみがえるが、私には冬の夜、激動の世紀に残ったこの国の古都の星空を眺めつつパンをかじっては、またしても暗い閲覧室に消えていった若人の後姿が異様に想い出されてならない。歴史の現段階でも、風雲に耐えつつも知的活動を支える宝庫ともいうべきものが図書館であるということを痛感できたことは私の貴重な体験の一つである。（編集者註：中山氏は昭和31年に本学文学部西洋史学修士課程修了後、昭和37年より同41年までポーランドに3年、オーストリアに約1年留学されました。現在京都産業大学講師）



—— 展 観 ——

「維新資料展」開催

—— 尊攘堂遺品より ——

読書週間にちなむ秋期恒例の展観は、さる11月7日から同10日までの4日間、本館陳列室において開催された。今回の展観は表記のごとく「維新資料展」と銘うって、本館創設時より伝わる「尊攘堂」遺品を陳列したもの

である。

この「尊攘堂」遺品については、年輩の方はご存知であろうが、維新の志士の一人で、のちに内務大臣となった品川弥二郎元子爵が、同志であった人々に関する資料と、彼等からその節義をしたわれていた先人たちに関する資料を収集して、本学に寄せたものである。

今回は、特に今までの展観で陳列されたことのなかったものを中心に選んで御覧に供した。

貼交屏風、貼交書幅など、幕末の志士が品川にあてた書簡を貼りまぜて、屏風や、幅にしたもののほか、高杉晋作の大型肖像額、品川弥二郎木像、水戸烈公撰の歌かるたなど合計31点を陳列したが、多くは20才台で若い生命を散らした志士たちでもあり、熱心にその筆跡に見入る観覧者で連日にぎわった。

テキサス大学出版部第2回寄託図書

本年7月号でプリンストン大学よりの寄託図書をご紹介しましたが、その後もプリンストン、テキサス両大学からの配本が続いています。

本号ではテキサス大学の近着分をお知らせします。なお詳細は参考掛まで。

(人文科学関係)

- Arrowsmith, W. & Shattuck, R., *ed.*: The craft & context of translation. 1961.
 Axelrad, J.: Philip Freneau. 1967.
 Blotner, J.: The modern American political novel 1900-1960. 1966.
 Braddy, H.: Hamlet's wounded Dame. 1964.
 Catalogue of the Dickens collection at the University of Texas. 1961.
 Cline, H. F., *ed.*: Latin American history. Vol. 1, 2. 1967.
 Dawson, J. F.: Friedrich Schleiermacher. 1966.
 Edwards, E.: Painted walls of Mexico. 1966.
 Ezra Pound and Sextus Propertius. 1964.
 Gaillardet, F.: Sketches of early Texas and Louisiana. 1966.
 Galloway, D. D.: The absurd hero in American fiction. 1966.
 Gilbert, J. G.: Jonathan Swift. 1966.
 Goldstone, A. & Sweetser, W.: A bibliography of Arthur Machen. 1965.
 Handy, W. J.: Kant and the southern new critics. 1963.
 Hereford, C. F.: Changing parental attitudes through. 1963.
 Hodge, F.: Yankee theatre. 1964.
 Iscoe, I. & Stevenson, H., *ed.*: Personality development in children. 1960.
 Lewis, R. W. Jr.: Hemingway on love. 1965.
 Mills, G., *ed.*: Innocence and power. 1965.
 Mollenauer, R., *ed.*: Introduction to modernity. 1965.
 Nelson, L. H.: The Normans in South Wales, 1070-1171. 1966.
 Newcomb, W. W. Jr.: The Indians of Texas. 1961.
 Newcomb, W. W. Jr.: The rock art of

- Texas Indians. 1967.
 Nist, J.: The modernist movement in Brazil. 1967.
 Reynolds, R.: Thomas Wolfe. 1965.
 Reuter, F. T.: Catholic influence on American colonial policies, 1898-1904. 1967.
 Rosenmeyer, T. G.: The masks of tragedy. 1963.
 Sibley, M. M.: Travelers in Texas 1761-1860. 1967.
 Starnes, D. T.: Renaissance dictionaries. 1954.
 Vega, G. d. l.: Royal commentaries of the Incas. 1966.
 Whitbread, T. B.: Seven contemporary authors. 1966.
 Zukofsky, L. & C.: Bottom, on Shakespeare. Vol. 1, 2. 1963.
 (社会科学関係)
 Cole, W. E.: Steel and economic growth in Mexico. 1967.
 Gardner, M. A.: The Inter American Press Association. 1967.
 Havens, M. C.: The challenges to democracy. 1965.
 Johnson, A. C. & others: Ancient Roman statutes. 1961.
 Kelly, I.: Folk practices in North Mexico. 1965.
 Moore, B. M. & Holtzman, W. H.: Tomorrow's parents. 1965.
 Thompson, C. C., *ed.*: Institutional adjustment. 1967.
 (自然科学関係)
 Herrick, J. C.: The evolution of human nature. 1956.
 Sheer, D. E., *ed.*: Electrical stimulation of the brain. 1961.
 Wall, H. S.: Creative mathematics. 1963.
 Williams, R. J.: Free and unequal. 1953.

あとがき

例年のごとく読書週間を迎え、そして終えた今、“本食い虫になること”を自分の好きな仕事と述べた先人の言を想起すれば、紙文化の氾濫にあえぐ現代のわれわれは、ともすれば余りに多くの亀裂の中でしか“本食い虫”をとらえていないのではないか。真に主体性ある“本食い虫”と、そしてさらに creative な仕事をめざさんがために、厳しい京都の冬に立ち向かおう。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 4, No. 4 (通巻19号) 1967年11月15日発行・編集発行人：岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表77-8111 (内線) 2220-2238